連続講座　カトリック教会の音楽　第２回

永原恵三

第２回は前回に続いて10月の教会のこよみと音楽についてお話しします。

　10月は「ロザリオの聖母」の月とされ、10月7日は「ロザリオの聖母マリア」の記念日となっています。これについては、以下に『毎日のミサ』（2025年10月号、25–26）から引用します。

　「この記念日は、1571年のレパントの海戦でキリスト教徒がオスマン・トルコに対して勝利を収めたことを記念して、ピオ5世教皇によって定められた。この勝利はロザリオの祈りによってもたらされた聖母の助けによるものであると信じられていた。きょうの祝日は、神の御子の受肉、受難、復活に特別に結ばれたマリアに導かれて、キリストの秘義について黙想するよう励ましている」。

　なお、カトリック教会では聖母を記念する日が多くあり、また聖母像も多数存在しますが、それは聖母が「信仰」の対象であることを示しているのではありません。聖母は神そしてイエス・キリストへの取り次ぎ、取りなしをする人として崇敬されています。この点は、後述する「アヴェ・マリアの祈り」の言葉を読んでいただければ、具体的に理解できることと思います。

　「ロザリオ」（羅：rosarium、英：rosary、独：Rosenkranz）とは、『新カトリック大事典』によれば、「カトリック教会において広く親しまれる祈りの形態。伝統的な形式では、救い主イエス・キリストとその母マリアの主な喜び・苦しみ・栄えの秘義の黙想を行ないながら、アヴェ・マリアの祈りを繰り返し唱える。マリアとともにイエス・キリストによる救いの秘義に思いを巡らし、父なる神に感謝をささげるところに意義を有する」（『新カトリック大事典』、第Ⅳ巻、2009年、1448頁）、と記されています。また、下記の数珠それ自体もロザリオと呼ばれるとのことです（同上、1449頁）。

　具体的な祈りの仕方は次の通りです。下図１の数珠を順に繰りながら、アヴェ・マリアの祈りを繰り返し唱えます。1個の珠（下図では黒）は主の祈り、10個の珠（下図では白）はアヴェ・マリアの祈りで一組をなし、1連の終わりに栄唱を唱えます。5連で1環を唱えたことになります。1連で10回のアヴェ・マリアの祈りと主の祈りを1回、栄唱を1回唱え、1環では50回のアヴェ・マリアの祈りとそれぞれ5回の主の祈りと栄唱を唱えることとなります。

　次に、15世紀から20世紀までの長い間、伝統となった基本的形式について、『新カトリック大事典』（1449頁）を参照して以下のように整理します。

三つの秘義
　喜び（第１環　受肉）
　苦しみ（第２環　受難）
　栄え（第３環　復活・昇天・聖霊降臨）
それぞれの秘義に関して五つの黙想を行なう。
　第１環　喜びの秘義
　（１）受胎告知、（２）マリアのエリザベト訪問、（３）降誕、
　（４）神殿奉献、（５）神殿にいる少年イエス
　第２環　苦しみの秘義
　（６）ゲッセマネでの祈り、（７）鞭打ち、（８）茨の冠
　（９）十字架を担うキリスト、（１０）十字架上での死
　第３環　栄えの秘義
　（11）復活、　（12）昇天、　（13）聖霊降臨、
　（14）マリアの被昇天　（15）聖母戴冠

写真1．ロザリオの例（筆者所有および撮影）

次頁の図1はドイツのケルン大司教区で用いられている聖歌と祈りの本　*Gotteslob*『神に賛美』から、ロザリオの祈りについての説明箇所です。

1　十字を切り、使徒信条（信仰宣言）と「栄唱」を唱える十字架。
2.　「主の祈り」を唱える珠。
3.　三つの珠で、各々「信仰」、「希望」、「愛」に則して「アヴェ・マリアの祈り」を3回唱え、最後に「栄唱」を唱える。
4.　「主の祈り」を唱える珠。
5.　いずれも10の珠で「アヴェ・マリアの祈り」を10回唱え、（最後に栄唱を唱える。）
（補足）1から5はいずれも、十字架や珠を指で持って繰りながら唱えます。

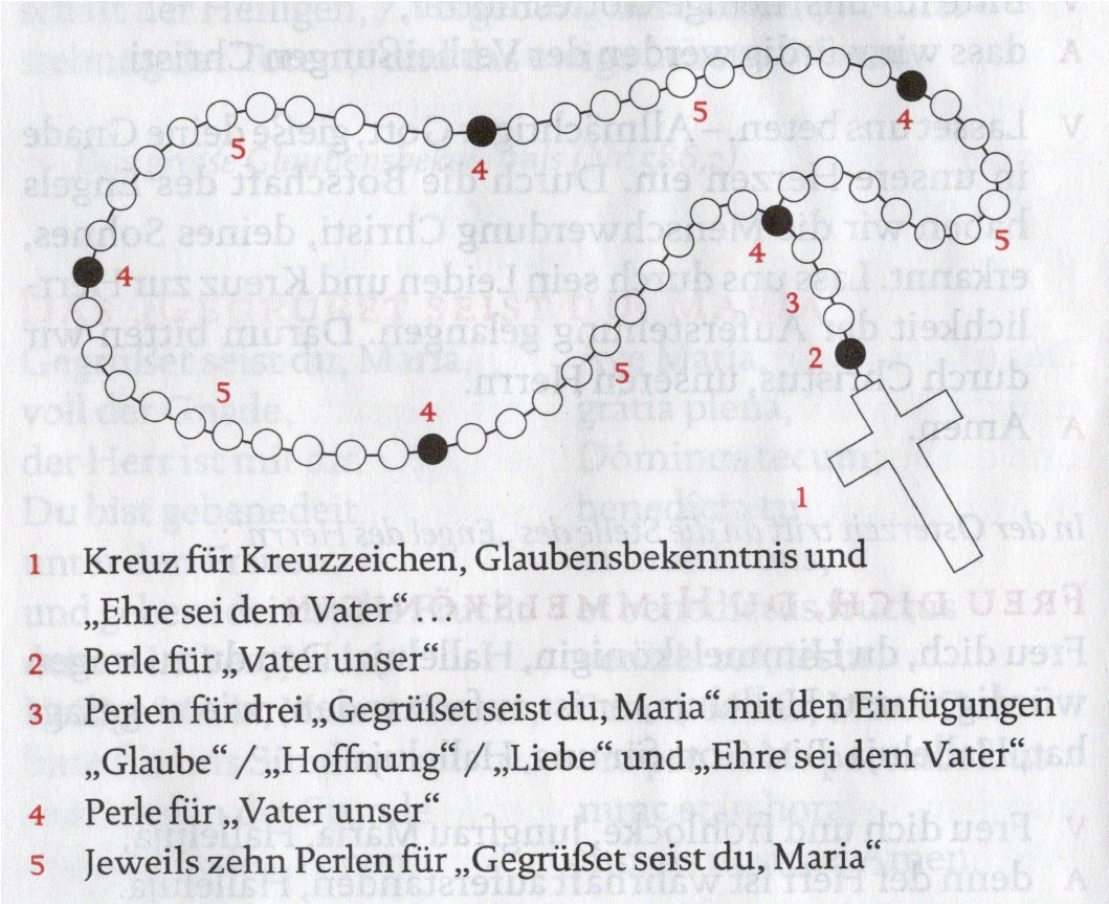

図1.　ロザリオの説明（*Gotteslob*　2013　38）（筆者撮影）

アヴェ・マリアの祈り

この節はロザリオの祈りの中心をなす「アヴェ・マリアの祈り」について記します。これについては、以前に『連載講座カトリック教会と音楽』第１回にて掲載しましたが、口語訳をはじめ全体に少し修正して再掲いたします。

「アヴェ・マリア」については、古い信徒の方々は「天使祝詞」や「めでたし」として馴染んでおられると思います。その当時は古文調で唱えられましたが、現在では以下の通り口語で唱えられます。口語でも変更がありましたが、現在の日本語は2011年6月14日に、日本カトリック司教協議会で承認されました。

以下に、ラテン語と日本語（2011年版）を記します。

Ave Maria, gratia plena　　アヴェ、マリア、恵みに満ちた方
Dominus tecum:　　主はあなたと共におられます。
benedicta tu in mulieribus,　　あなたは女のうちで祝福され、
Et benedictus fructus ventris tui Iesus.
ご胎内の御子イエスも祝福されています。

Sancta Maria, mater Dei,　　神の母聖マリア、
ora pro nobis peccatoribus　　わたしたち罪びとのために、
nunc et in hora mortis nostae.　　今も、死を迎える時も、お祈りください。
Amen.　　アーメン。

この祈りは、二つの部分から成り立っています。前半の4行はルカによる福音書第1章28節のお告げの天使（ガブリエル）による挨拶の言葉が2行、続いての2行は、同じく42節の親族エリザベトからマリアへの祝いの言葉です。そして、後半のSancta　Maria以降の4行は、マリアへの祈願にあたります。マリアに保護を願い、取り次ぎをしてくださるように願います。この前半と後半とは成立時期が異なっています。前半部分は6世紀頃から東方教会で歌われていて、西欧では、7世紀のローマ典礼書に、神のお告げの祭日、待降節第4集の水曜日、待降節第4主日のミサ中の奉納唱として記されている（鈴木忠一　1996　『カトリック大事典第1巻』：32頁、東京：研究社）という記録が残っているようです。

後半部の祈願の部分については、野村良雄、土屋吉正両氏によれば、1440年頃のシエナのフランシスコ会士、聖ベルナルディヌスによって加えられた（野村；土屋1981『音楽大事典』：6頁、東京：平凡社）、とされます。公式には1568年教皇ピウス5世の聖務日課書改訂で最終決定されました（鈴木　同上）。第二バチカン公会議以前のグレゴリオ聖歌集である”Liber Usualis”（以下LU：頁）では、おそらく10世紀頃の旋律で神のお告げの祭日（LU：1416）、奉納唱の（LU：1318）、（LU：355）に前半部分のみの聖歌がみられ、現在の後半も含めた聖歌は（LU：1861）です。

現在の私たちに馴染みの深いアヴェ・マリアの旋律（現在『カトリック聖歌集』541の楽譜）が16世紀に確定されたものだとすると、それはかなり新しいことになります。また、前半部だけの古い旋律は、メリスマ的（一つの音節を多数の音で長く伸ばして歌う）で、天使とエリザベトそれぞれの祝いの言葉を、豊かな旋律で彩っていると言えましょう。それに対して、新しい方の旋律は、まったく対照的にシラビック（一音節に一音符が対応）で、言葉をはっきりさせて歌うようになっていて、伝統的な賛歌のスタイルを取っているとも言えます。

《アヴェ・マリア》の音楽

アヴェ・マリアの祈りはグレゴリオ聖歌だけでなく、いつの世にも作曲家たちの霊感を揺さぶるものであったに違いありません。数多くの曲が作曲されており、それらは典礼暦の聖母マリアの日だけでなく、毎日の祈りのなかでも唱えられたり歌われたりします。このように、アヴェ・マリアの祈りは典礼暦に基づきつつ、なおも、日々の祈りとしても人びとを支える祈りです。

アヴェ・マリアの音楽は、16世紀から17世紀のルネサンスの作曲家、ジョスカン・デ・プレ Josquan Desprez(1440頃ー1521）やビクトリア Tomás Luis de Victoria(1548-1611)などによる優れた楽曲があります。

さて、時代が少し飛びますが、多くの《アヴェ・マリア》のなかでも一般社会の皆さんに馴染みのあるのが、フランツ・シューベルトFranz. Peter Schubert（1797–1828）によって作曲された歌曲でしょう。ほかに、シャルル・グノーCharles François Gounod（1818–1893）による曲も有名です。他に、合唱を愛好する方々では、ジャック・アルカデルトJacque Arcadelt（1504/5-1568)作曲とされる曲も馴染みがあると思います。その他、多くの西洋の過去から現在にかけての作曲家の手によって、ほぼ同じテキスト（歌詞）に、時代の様式に応じて作曲されてきました。現代日本の作曲家では、ドイツを中心に活躍している細川俊夫（1955生まれ）が、混声合唱のための《Ave Maria》（1991）を現代的手法で作曲しています。

ところで、シューベルトの曲はウォルター・スコットの『湖上の美人』と言うドイツ語の詩に作曲されたもので、歌詞そのものは本来別物ですが、ラテン語の歌詞に置き換えて演奏されることも多いです。ただ、元々ドイツ語の歌詞に対応した音楽ですので、ラテン語で歌うのはかなり不具合が多いです。グノーの作品は、ご存知のようにJ.S.バッハJohann Sebastian Bach(1685ー1750）の〈平均律クラヴィーア曲集第１巻〉前奏曲ハ長調に旋律を付加した曲です。また、アルカデルトの作品は19世紀の音楽家が当世風の和声進行で編曲したものです。アルカデルトは16世紀の人で、その当時の音楽様式は19世紀と異なり、原曲は愛だの恋だのを歌った世俗曲です。

近年とてもよく歌われている、カッチーニCacciniの《アヴェ・マリア》は、こちらも全く別の時代の作曲者名が付けられています。G. カッチーニは16世紀から17世紀に活躍したイタリア人で《アマリッリ麗し》という曲がよく知られています。『イタリア（古典）歌曲集』の最初に掲載されています。こちらの《アヴェ・マリア》も音楽様式的には明らかに19世紀後半のチャイコフスキーやラフマニノフなどの音楽に類似したものです。カッチーニは初期バロックの《Le nuove musiche》（新音楽）で知られた、当時の先端的作曲家の一人です。しかし、実際には、この《ア

ヴェ・マリア》は、ソ連時代のウクライナの作曲家がカッチーニに名前を借りて書いたそうです。

こうしてみると、《アヴェ・マリア》の歌はいずれもかなり屈折した経緯を経ているように思いがちですが、大切なことは、どの曲もその美しい旋律ゆえに多くの人びとに感動を与え続けたことです。逆に、この美しい旋律の歌詞は、アヴェ・マリア以外にはないと思えるような、すばらしい旋律だったのではないでしょうか。美しい音楽や心に響く音楽、楽しい音楽などで、気に入った旋律は、いろいろな歌詞で替歌にすることが日常的にあるように思います。

後世の人びとにいろいろな霊感をもたらしたのが、《アヴェ・マリア》の祈りであり、言葉であり、その旋律だったのかもしれません。

現代のカトリック教会では

現代のカトリック教会では、1962年から65年にかけて開催された第二バチカン公会議の後に、大きな改革があり、ラテン語だけではなく、現地語に翻訳された祈りが唱えられ、現地語で作曲された聖歌が歌われています。グレゴリオ聖歌を歌っている教会はほとんどありません。日本では、合唱曲の《水のいのち》で有名な高田三郎氏や新垣壬敏氏を中心とした、日本人による聖歌が歌われています。

これからも新たな《アヴェ・マリア》が作曲されることもあるでしょう。楽しみにしたいものです。